

幼児文庫と幼児教育

小川 剛

読書の秋。これは暑さと活動の夏の季節を送り、落ち着いた気候と雰囲気なかで、心にゆとりをとりもどし、読書によって新たな生活の道を模索していこうという人間心理のあらわれかと思う。ところが、子どもたちの読書離れ、活字離れが

いわれて久しい。子どもたちは、マンガ、TV・パソコンゲームにその眼を奪われて、活字に眼が向かないのである。しかし活字は人間のみが駆使

しうる重要なコミュニケーション手段であり、それによる情報の授受なくしては社会生活は円滑に行なわれないであろう。また読書による知識・情報の獲得、思考の深化なしには「人間」としての生活を送ることができないであろう。

そのような危機感を察知してか、平成九年六月、学校図書館法が、約五十年ぶりに改正された。これにより十二学級以上の学校に図書館の専



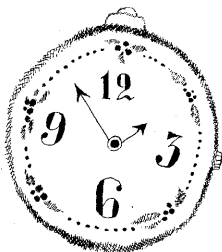
門家としての司書教諭が平成十五年度から配置されることとなった。これは従来の詰め込み教育によって子どもたちに大量の客観的な知識・技術・情報が注入され、それに押しつぶされるように子どもたちは自己を喪失し、創造力を枯渇させていったことへの反省があるであろう。現在は子どもの「生きる力」の育成を重視し、一人ひとりの子どもが自ら問を発し、調べ、発表するという自主性を重視する教育が目指され、これが、読書・図書館利用の自主性重視と重なる。これによって学校図書館活動の活性化とともに学校教育の新たな進展が期待される。

読書の問題は、本来、学齢期にある子どもの問題である。しかし子どもの読書離れなどの現象の根源をみてみると、幼児期の問題が深くかかわっていることが指摘される。子どもが幼児期に「読書」にいかにかかわってきたかということが学齢

期以降の子どもの読書活動に一定の影響を与えていることがあきらかになってきている。そこで、ここでは、幼児期の「読書」の問題について考えていくすがとしたい。

幼児期にある子どもは、当然のことながら、人生経験が浅く、大脳の発達も十分とはいえず、その思考・行動の範囲は限られており、そのもてる知識・技術は少ない。それに反して心身の発達は著しく、豊かな想像力を持ち、好奇心も旺盛で、何でも知りたがる。とくに幼児は「お話」に興味を持ち、何でも聞きたがる。

どこの国においても、昔から幼児を対象とした「お話」、
「昔話」が数多く残



が、「反響がないことから「お話」にのめり込んで

いった。前述したような理由から題材は昔話から

とった。しかし昔話が語られた時と時期が離れて

いることから今風にアレンジし、聴衆の反応を敏

感に感じとって、一度おかした失策は二度と起

ささないという真剣ぶりであった。実際、筆者自身

「お話」を終えるとホッとし肩に入っていた力が

一度に抜ける思いをした。三年間続けてみて自分

なりに出した結論は、成功する「お話」は――三

歳児を中心とする――、ワン・エピソード、内容

では三回ほどの繰り返しを行い、明確な結末で、

時間は約三分。

そして必要があつて筆者が附属幼稚園に行くと

びに園児にとりかこまれ、「園長先生、お話」と

「お話」をせがまれた。それほどまで園児は「お

話」を聞いたがった。このことから、幼児施設で

は、子どもたちに「お話」をしてやることは好ま

しいことではないかと思うようになった。

一九六〇年代の後半より、図書館の分野でも児

童サービスが活発化した。しかし「ポストの数」

ほど図書館のないわが国では、それを補うものと

して地域住民、とくに地域の母親たちが、自宅を開

放したり、地域の公共的施設の一部を借用して、

いわゆる「子ども文庫」を開設した。「子ども文

庫」は図書館とともに児童サービスを行なつたの

であるが、最盛期には全国で五千を越したといわ

れる。「子ども文庫」は、その柔軟な対応ぶりか

らして、児童サービ

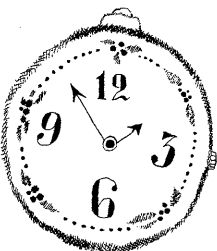
スの点では、公立図

書館を凌駕していた

のではないか。

図書館・子ども文

庫での幼児向けの





サービスとなると、主に絵本による「読み聞かせ」と貸出ということになる。幼児は、基本的には、文字が読めない。したがって活用されるのは絵本ということになる。しかし絵本といっても絵の部分为主体となり、その部分があつたとしても、絵本全体がよく理解されるには「解説」にあたる文字の部分があつなければならぬ。そこで図書館・子ども文庫の幼児向けサービスは、「文字」部分の「読み聞かせ」ということになる。絵本の「読み聞かせ」によつて、幼児にとつて存在していた文字部分の壁を取り去り、絵の部分と文字の部分とを幼児なりに融合し、その絵・その絵本もつ意味内容を理解し・納得するという能動的な行動なのである。そしてこれによつて幼児自身の理解の領域を拡げていくであらう。

しかし一般的に幼児は、絵本を借り出す時、事前に「読み聞かせ」をしてもらつてからというこ

れはこれによつて絵本の内容を理解して借り出すということになるのであつて、「読み聞かせ」をしてもらつて内容のわかつている絵本を借り出すということとは、「お気に入り」の絵本は幾度も「読み聞かせ」してもらつてということの意味するであらう。これには幼児にとつて一度だけの「読み聞かせ」ですべてを理解するということにはならないということがあつて、家庭に持ち帰つて、文字を解する人に幾度も読んでもらう。そしてその理解の度合を高めていく。

絵本の「読み聞かせ」は、昔話の「お話」とちがつて子どもの興味・関心とつながりがあるものができてきて幼児の興味・関心の拡がりに通じるであらう。また「読み聞かせ」には情緒面でプラスになる要素があるようである。それは、周囲の人が、幼児自身あるいは幼児の周辺の人たちのため、一定時間を割いて「読んでくれる」というこ

とから感じられる「愛情」の問題である。幼児の場合、この要素がとくによいのではないかと思う。これが幾度も同一の絵本を借り出していく理由になっているのではないか。

ともかく「読み聞かせ」は、表面的にみえるように受身の行為ではなく能動的な行為である。そして幼児が絵本の「読み聞かせ」に関心を示すことには、絵本によって表現されている内容に興味を示し、「説明」の部分に当る文字の内容を明らかにしたいという欲求によるのであろう。これは絵本の内容に関心を示し、それを自力で読みほどこいていきたいという文字学習のレディネスが形成されつつあることの証でないかと思う。

幼児に「お話」（ストーリー・テリング）をし、絵本の「読み聞かせ」をする公的配慮としての「幼児文庫」の構想は、幼児の文字学習の早期化を図

るものではない。その真意は、今や、幼児文化の一部をなしている「お話」や絵本の「読み聞かせ」を幼児自身が十分に享受し、悔いのない幼児期を過ごさせることにある。

幼児文庫といっても特別な施設を必要とするものではない。保育室のコーナーにいくらかの数が多いほどよい——絵本のコレクションをもち、「お話の会」を開く時には、そのための空間があればよい。必要不可欠なものは「読み聞かせ」をしてくれる人、「お話」をしてくれる人である。これはボランティアに頼るほかに道はないであろう。

ともかく始めてみることによって実績を積みこむとである。絵本については、近くの公共図書館と連絡をとることによって団体貸出でかなりの量の絵本が借りられる。案ずるより生むがやすし。

（独協大学）